

431 3380^P 1/2

3387^P
3388^P

伊勢口造 3387^P

3382^P 1-1/2
3382^P 1-1/2
3382^P 1-1/2

先には述べた通り

3,392^P

1812 436 3382^P 1-1/2
1812 436 3382^P 1-1/2
1812 436 3382^P 1-1/2

3385^P 1/2

龍原神宮
猿田彦神がすつかりおとなーくなくなったとは
いえ、やはり用心するにこーたことはない。
倭姫命は、船に乗り、沖合に出て、南の方へ
漕ぎ進んでゆかれた。
船はやかて、志摩半島の基部あたりへと至
った。
ここに倭姫命は、度会の上河上りゆき、
多気郡の山の中に神宮に（龍
原の神の宮）を定めて、天照大神（八咫鏡）
をお祭りされた。（日 伊勢国風土記逸文）
人龍原神宮参照。第六十五章へ住みより所
を求めて、の項において既述）
なお、先述したように、天照大神（八咫鏡）
が始めて天より降っておいでになったこの龍
原神宮のことを、日 玉岐波流磯宮とも、
多気郡の龍原宮の大神主とな
ったのは、伊勢国造天日別命（天日鷲
命）の子孫とされるあの伊勢大若子命であ
る。

3387^P 1/3
829^P

3388^P
829^P

1812 436
27. 35 37

3380^P 1/2

3367^P 1812

541

1812 436 12

こと

3.393P

211
南3360°-4

427ク係70
紀上270°1分
③ 3360°同文

3383-1/3
に転写ス
32Pを移入

たろうか。

*

時に、天照大神は、倭姫命に誨へて、

是の神風の伊勢國は、常世の浪の重浪歸

す國なり。傍國の可憐一國なり。是の國に

居らむと欲ふ

と申さ小たという。(垂仁紀二十五年三月十

日条参照や第六十五章「伊邪國(宇佐國)に

ある二ヶ所の内宮」において既述)

先にも述べたが、

①国東半島基部馬場山頂の天照大神の大神宮

にある内宮あたりの地形、

②志摩半島基部多気郡の山中の天照大神

(八咫鏡)の神宮である外宮(龍原神宮)あ

たりの地形、

の双方を見較べてみると、かなりよく似て

いるといえよう。

そこで、天照大神(八咫鏡)を奉戴して、周

行天下し、倭姫命は、よう

で転写

... (紀上270條14) 15 紀上269

平聲部

3,394^P

を求めて笠縫色を出発さる時、
飲明二十五

仁二十六年（冬十月甲子）をとりて、伊勢国の

とある。(垂仁紀 二十五年三月条の一書の所伝

参照
○
既述
)

い	(1)
る	な
か	お
、	、
ー	「
ー	垂
ー	仁
ー	天皇
垂	の
仁	二十
天皇	六年
に	」と
相当	記
する	され
欽	て
明天	

皇の二十六年（五六五）のことであつたろう
と考へた。い。（既述）

また、この時、天照大神（八咫鏡）を、伊勢

伊勢国の遷宮にお遷りたのて、
龍原宮にたのて、
多気大神宮へお遷し

した
山中

と想到される。(既述)

文々如律令
扶保系段民にフイッて
③ 3382-3/ 3397/2 3,395P
改行

五十鈴川上 伊勢神宮 樹 35° 13' 伊勢神宮 35° 伊勢神宮 35°
伊勢神宮 35° 下 35° 伊勢神宮 35° 伊勢神宮 35°
4~5斤 下 伊勢神宮 35° 伊勢神宮 35°
あうま 荒木田 伊勢神宮 106
タイル

多気大神宮を度会郡へ遷す
南伊勢の天照大神(八咫鏡)の神宮曰外宮曰
(龍原宮)に仕えたのは、曰磯部氏曰
の度会氏(神宮)
また、龍原宮の神人ばかりでなく五十
鈴川下流の二見郷の郷長も、曰磯部氏曰だ
った、
という。(「伊勢神宮」桜井勝え進、学生社
三五頁参照)
前述のように、続日本紀、文武二年
(六八九)十二月二十九日条に、
「多気大神宮を度会郡へ遷す」
とある。
この遷宮の時、磯部氏一
族も度会郡の平野部へ移っていったのであろう
と想像される。

*

(2)

伊勢神宮 34°
H13.10.25 (OK)

由3400°72分
3.396 P 外宮
3384-2/4

へんか 2001°
変革 変えあつたあつと
太いコナ

③3405°
③3333-1/2

情況 1087°
③3384° 1/4
タイフル

日龍原宮に(タタミ大神宮)から、度会郡
 遷された日外宮に(離宮)には、天照
 大神(八咫鏡)が祭られていたと推察される
 尚、その直後の状況を述べているのであろう。
 当時、度会の大神主が、天照大神を日外
 宮において朝夕にお祭り申しあげていた
 という。(「伊勢神宮」桜井勝之進、学生社
 三七頁参照。既述)
 「度会神主」という名は、平城京遷都(七
 〇)の翌年、元明天皇の和銅四年(七一
 以後のこと)であつて、それ以前は磯部氏を称
 していた。(「表参照」)
 もつとも、禰宜が度会神主を名乗るようにな
 った後も、下級の神官たちに磯部氏が少な
 くなかつたところを見ると、磯部氏と
 いう底辺から出たエリート一族が、度会と
 いう国名をとつて度会氏と称することに
 つたのかも知れない。

内宮に(仕える荒木田神主(中臣氏)
 外宮に(仕える磯部氏(度会氏))
 (現在の外宮の地)

「うらみ」
のりら行

へんかく 9/16 ④ 3406 改変
変革 古い制度なども変えて新しくする

3,397^P

という。(「伊勢神宮」桜井勝彦進、学生社、
三四頁参照)

地^ちに^て、^(*)平城京遷都(七一〇)以降、南伊勢の
大^{だい}変^{へん}革^{かく}が相^{あい}次^つい
だ^だようである。

「宇佐国の天照大神の宮」曰^い内^{ない}宮^{きう}に^が、伊勢
国^{くに}の^に外^と宮^{みや}に^は(離宮)のすぐ近^{ちか}くへ遷^{うつ}さ^れぬ
た^たし^し出来^で事^きと
と^とい^いう^うか、^(出来事)そ^そも^もそ^その^の発^{はつ}端^{たん}だ^たた^たの^ので^では

なかろうか

田^た神^{かん}主^{ぬい}に^つり^りて^て述^のべ^べる^ると^とい^いう^うよう^{よう}。

察^{さつ}する^ると^とい^いう^う。

へ宇佐国から伊勢国への天照大神降臨の際

天^{あま}照^{てらす}大^{おほ}神^{かみ}の^のお^お伴^{とも}を^をし^して^て五^い十^{じゅう}鈴^{すず}川^{がわ}の^の川^{かわ}上^{かみ}の^の

内^{ない}宮^{きう}に^は降^{くだ}り^りて^てきた^{きた}の^のは^は、宇佐国で大きな

勢^{せい}力^{りき}を^を持^もつ^つた^た大^{おほ}鹿^か嶋^{しま}命^{のみこと}の^の子^こ孫^{そん}(鎌足^{かまたり}の^の支^し系^{けい}筋^{しん})

荒^{あら}木^き田^た神^{かん}主^{ぬい}の^の祖^そで^であ^あった^{った}ら^らう^う。

④ 3350
10頁

3350-4/5 3348-9P 3349P 3350-4/5 3398P

3401P 3411P 伊勢神宮 106P 3397Pの系図 3350-4/5

に當る。その子孫は、その血筋を受けた常磐（中臣氏）
の系図の主張するところによると、中臣大鹿嶋
命の子孫であり、伊勢の神主組織のなかで中
臣氏を祖と称するのはこの一族だけである。
という。一「伊勢神宮」桜井勝進、学生社
一〇六頁参照）
へ用明二年（五八七）に中臣氏の本家筋が
滅んだ後、中臣氏の傍系筋の大鹿嶋
命の子孫である常磐（天見通命）が、中臣
連姓を賜わるとともに、内宮の禰宜と
定められ、御食子（鎌足の父）の時まであつ
たその官として仕えていた。
のであろう。（第六十五章「大鹿嶋命」の項
において既述）
。しかしながら、

正系筋の

延^{てい}で^お仕^ええ^する^よう^にな^つた^ので^下
の^日内^{ない}宮^{みや}の^禰宜^{ゆき}と^いう^職は^荒木^き田^だ神^{かん}主^{ぬし}の^祖に^よつ^て引^ひき^継が^れた^と
神^{かん}主^{ぬし}の^祖に^よつ^て引^ひき^継が^れた^と

と推察される。(既述)

。そして後、

へ平城京遷都(七一〇)の時に

を奉戴した中臣氏(荒木田神主の祖)が、

佐国^{さのくに}の^龜山^{かみやま}の^日内^{ない}宮^{みや}から、伊勢国^{いせのくに}の^{五十}鈴^{すず}

川の川上の日内宮へ、天下ってきたのでは

なかうか✓

と想像される。

② 一方とも宇佐国^{うさのくに}の日内宮^{ないみや}の天照大神^{あまてらすおほみかみ}を

伊勢国^{いせのくに}にお迎^{むか}え^することとなつた時、

伊勢国^{いせのくに}の日外宮^{ひつみや}の(離宮)において天照大神^{あまてらすおほみかみ}

(八咫鏡)を祭^{まつ}つてきた磯部一族^{いそべいっしゆ}は、どんな

思^{おも}いを抱^{いだ}いたとであつたらうか。

⑦ これまで長らく仕え奉^{まつ}つてきた日外宮^{ひつみや}の

(離宮)の天照大神^{あまてらすおほみかみ}(八咫鏡)は、一体、ど

相違

同文 ⑤5270-2 ⑤3348-2 1-90 (経)1-165P410P 3,400P

うなるのだ
 といった心配もあつたに相違ない
 ・いかもさらさら
 内宮の天照大神を奉下つてくる中臣
 何もかも悉く譲り
 といふ危惧感さえ、あつたかも知れない。
 砕き、一族を説き伏せ 全てを天照大神の
 御心の内に委ねた。
 ここに内宮の天照大神をお迎えするに
 当つて示した祖父・高志の二人の献身的な忠
 孝は、朝廷に於て高く評価されたのであろう。
 ・平城遷都の翌年(七一)、これ迄通り外
 宮の神主として仕えることが許されただけ
 でなく、二人に「渡相神主」という
 姓が下賜された。
 ・続日本紀に
 「和銅四年(七一)三月六日、伊勢國の
 磯部祖父・高志の二人に、姓を渡相神主と
 賜ふ」と記されている。
 (第50表参照)

⑤3387-2/3 左下

・なお、高志の名は他にみえないうが、祖父に
ついては豊受太神宮禰宜補任次第に

「大神主祖父」

とある。(「続日本紀」(一)新日本古典文学大

系、岩波書店、四一〇頁補注五一二四参照)

和銅四年(七一)三月六日の時

点では、

①伊勢国の皇太神宮 内宮の天照大神に仕

えていたのは、天御中主尊(二代目の

神功皇后)と伊香刀美の血筋を引く

中臣氏(中臣連姓)を賜わった常磐以降の

中臣氏(で、荒木田神主の祖だったことであ

ろう。(第50表、第武天皇の天武元年(七一

十二月十六日条、東原勝子公の嘆願文。第

②「伊勢国」の外宮(離宮)の天照

大神(八咫鏡)を祭っていたのは、天御中主尊

の血筋を引く天日別命の子孫と伝える度会氏

(祖父・高志)だったのであらう。(「伊勢

国風土記逸文」第六十五章へ「若志」

と云ふ田彦神の爲行の項参照)

高志が父祖父の名を龍名したの

と思われろ。

別宮・摂社について

①欽明朝に、天照大神がタクマが原から宇佐

国へ遷御された時以降、天上の国の天照大神

の宮、内宮に付随していた数々の別宮や摂

社は、新たな内宮に近づく、次から

次へと天降りていったことであらうか。

②それを見習い、南伊勢山中の天照大神

(八咫鏡)の宮、外宮(離宮)のまわりにも

同様の名を持つ数々の別宮や摂社が、次々に建

た。文武五年、南伊勢山中にあった別宮や摂社も、追従して移ったに

違いない。後年の平城遷都の時、宇佐国の内宮は

伊勢国の外宮(離宮)のすぐ近くへと遷

された。と思われ。(既述)

④ではその時、宇佐国にあった数多くの別宮や

摂社は、どのように対処したのだろうか。

⑤「あまの宮」当然のことのように、それらの別

宮や摂社も、内宮の後を追った。

伊勢国へ移っていったのであろう。

⑥こうして、伊勢国平野部において、外宮(離

宮)内宮の別宮・摂社と、外宮(離

多賀神社 祭神伊弉諾 伊勢神宮 249P 二七

と推察される。

て
み
よ
う
a
こ
ん
かみ
ら
か
る
ほ
と

非常
①に
よく
似

て
い
る
こ
と
か
分
る
。

(1) 内容の別宮・摂社には

月読宮・伊佐奈岐宮・風日祈宮・田乃家神

社・田乃家御前神社・大土御祖神社・川原

神社

等
か
あ
る

(2) 外宮 別宮・摂社には、

月夜見宮・多賀宮・風宮・田上大水神社・

田上大水御前神社・土宮・河原神社

等がある。

(一) 伊勢神宮

桜井勝之進、学生

社、一七頁の図、二四九と二五一頁へ別宮。

摺社一覽表

3332-2/6
 3365-3/3
 3059-4/11
 3405-1/3

第47表参照

タイトル
 3364-3/3
 馬城山頂の口内

① 日豊受大神（梯儻）は、雄略天皇の二十二年（四七八）七月七日、（東松浦半島東部の素明）に地理的に相当する、（肥後国）の天
 あたりから、（天上の国）の天
 照大神の許へ迎えられたのであろう。（第47表参照）第五
 十五章へ豊受大神の項において既述
 ② また欽明朝に、宇佐国の日内宮の近
 くへ、日豊受大神を迎え奉ったように想
 される。
 第六十五章へ馬城山頂の口内

③3059-3/ 同文 遠い方 ④3402115 ⑤340613
相居方 ⑥3400 P25

版由3059"-3/11 1059

$3,405^P - 2/3$

⑤3365^{P-2/3}

⑦ $3059 - \frac{3}{11} \text{ qd}$

相控電圧 ⑤ 3400 P25 ⑥ 340613

⑤ そこで、次の年の七月七日の七夕の日、
 宇佐国^{うさのくに}の^{むすこ}外宮^{ぐわう}の豊受神^{とよけのかみ}（梯儔^{ていゆ}）を、

来る七月七日の七夕の

① 3408-1/4 144

伊勢神宮37 ④ 3059-5/11
雄略朝のことにて
⑤ 3333-1/2

3,405^p-3/3

(こ)

143...
てをたて

⑥ 3059-3/8, 4/8, 5/8
未 ⑦ 3365-2/3
#335

日 伊勢国の日外宮(離宮)の内にお招
きしてお祀りしよう
という構想が浮上ったのであろう。
⑥ このようにならうとわけて、
へ宇佐国の日外宮に鎮座してた豊受大
神(梯儼)は、東国伊勢国天照大
神の日内宮の許へ遷えられ、それまで天
照大神の日外宮(離宮)とされてきた神威
の内へ御案内されることになった。
と推察される。

*

この当時迄、日外宮(離宮)の度会大
神主は、天照大神の分身というべき日
を朝夕にお祭り申しあげていた。(既述)
だが、今この日外宮に離宮に御饌都神日等由
氣太神(梯儼)のことであらう)を迎え奉る

あまてらすおほみかみ
天照大神の

豊受大神宮 250P
 伊勢神宮 3405-3/8 87
 3,406P 豊受大神 37P
 百科23-586P
 止由氣宮儀式帳 1P 月2
 豊受大神宮 (伊勢神宮 250P)
 変革 3397P
 6111改 変 362P 変改め
 3333

準備が着々とすすめられていっ
 こと
 第六十五章へ周行天下の項参照
 第五十五章へ豊受大神

第六十五章へ周行天下の項参照
 第五十五章へ豊受大神
 いうまでもなく、伊勢国度会郡の口外宮に
 (天照大神の離宮とされてきた宮)に、大き
 な改変が迫られることとなった。

先ず、この口外宮(離宮)は、口止由
 氣(太神宮) (豊受大神宮)とも、口外宮と
 も称されることとなったのであろう。と解さ
 れる。

また、これまで天照大神(八咫鏡)を祭って
 お招きして御鎮祭するわけな

いた宮に、豊受大神を祭ることになったのだ
 から、天照大神の方にある程度の譲歩が必要
 と考えられたに違いない。

愛するお方の為に、天照大神はそつと身を
 お引きになったものと思われる。

米

豊受大神をお迎える以前の口外宮(離
 宮)において、ご正殿が天照大神(八咫鏡
 の殿舎であつたろう。

伊勢神宮64の図
通つ1380

御座所 888P
目三 2/72

3,407

版 7
618

3059-5/8
3333-1/2

161 次頁 14

とはいえ 現在、外宮の正殿には、豊受
大神とその相殿神三座が祭られてゐる。相
殿神（同社殿に合祀されてゐる神）三座は
御伴神である。（「世界大百科事典」平凡社、
へ伊勢神宮参照）離宮
それでは、外宮の天照大神は、一体、
どのようなことになったのだらうか。
すでに述べたとおり、外宮の天照大神
神は、正殿の東北の一角に設けられた御饌殿
の奥にひっそり祀られてゐるという。（第2回外宮、伊勢神宮）
「伊勢神宮」桜井勝え進、学生社、二一頁。
同三八頁参照。第六章へ周行天下の項
において既述）
●おやらく、天照大神は、豊受大神を
それまで御座所としておられた御正殿をお譲り
され、自ら目立たないように御饌殿
の内にまつと身を置かれたのであろう、と拝察
される。
●つまり、天照大神に朝夕お仕えする殿
舎は、外宮の正殿でなく、板垣内
の東北隅に建つ御饌殿なのである。（伊勢
神宮桜井勝え進、学生社、昭和四十四年五月二十日発行、三八頁参照）

「八咫鏡」と書かないこと！
3333-1/2 157
160頁

1か1次及11号

こと

3,408^P-1/4

止由氣宮儀式帳 46⁷ 右 上

新宮太³¹ 伊勢神宮 31⁷ に一部のみ

同文 由3059²-7/11 8号

新宮太³¹

伊勢の国

へ 外宮^{ガクウ}の祭神として豊受大神をお迎え

と考えてみた (第1表参照)

営^{エイ}された

天皇曰武^ムに相当する 聖武^{セイム}天皇の御代に造

へ伊勢^{イセ}国の外宮^{ガクウ}内の御饌^{ミケ}殿は雄略^{ユウリョク}

この物語にありては

いうことになる

の御饌^{ミケ}殿は雄略^{ユウリョク}天皇の御代に新造された

なるほど、止由氣宮儀式帳^{トヨキミヤギシキチャウ}によると、こ

とある (第十五章 豊受大神^{トヨケノオホカミ}の項末尾において既述)

大御饌^{オホミケ}。タハ乃^{タハノ}大御饌^{オホミケ}乎日別供奉^{ヒワケノホウボウ}

是以^{コレヲ}御饌^{ミケ}殿造奉^{ツクリマツテ}立。天照坐皇太神乃朝乃

さ小^コてい^イる。天照坐皇太神乃朝乃

由氣^{ユキ}太神^{タカミ}を迎えた記事に引き続^{ツグ}て

さ小^コた^タ止由氣宮儀式帳^{トヨキミヤギシキチャウ}には、雄略朝^{ユウリョク}に等^ト

桓武^{カク}天皇の延暦二十三年^{エンリョ} (八〇四) に撰^{セン}進^{シン}

天照大神を祭る外宮板垣内東北隅^{トウホク}の殿舎^{テンシャ}

三月十四日

御饌^{ミケ}殿

御饌^{ミケ}殿

「神宮」パンフレット27の厚さ、16の厚さ(種)
 四隅角部に柱がある
 見える
 16の厚さ 柱持柱の側にある
 正倉院 1100 収蔵
 百拜率(15)-174
 収蔵 1049
 ヒリ入って
 あさめること

3,408 P-3/4

伊勢神宮38P

た聖武天皇の御代に、御饌殿(天照大神を祭る殿舎)が建てられた。という事なのであらうと思われ。

この御饌殿は、北参道の方から拝しても、菅葺きの屋根千木堅魚木が、杉木立の間に見えかくれに仰がれるだけであり、あまりよく知られていない。

「板校倉」と称されるその特殊な建築様式は、古代の高倉(床の高い穀倉)の形を残しているといわれ、正倉院などの校倉造とともに、建築史上でも貴重なものである。

御饌殿は、平入切妻であるが、柱が使用されていない。横板壁でもってかこみ、それだけでは屋根の重量が全部この横板壁にかかるので、屋根を支える棟持柱が東と西に各一本ずつ

妻側の壁の外方にあつて突出した棟木の端を直接支える柱

太いコナ

天照、豊受大神 伊勢神宮 39 巻

皇大神 相殿 3 座

3,408^p - 3/4 3407^p

伊勢神宮 39^p

改行

つ使用されて

いる。俗に「井楼造り」ともい

われる。極めて特殊な建築である。

皇真図版 7 6/8

内宮にも外宮にも宝殿が二つずつあり、ま

た、外幣殿というのも両宮に一つずつあって

昔はみなこの「板校倉」であつたという。

「かし、今日にまでこの「板校倉」の様式

を残して残っているのは、唯一、外宮の御饌殿のみ

である。

御饌殿の内には、東方に日皇大神宮、西方に

豊受大神宮、少一さがつて同じ西方に

豊受大神宮の相殿神座の三つの神座が設け

られた。

もつとも、明治の新制によつて、皇太神宮

相殿神と、両宮の別宮の神々の神座合せて三

つが加えられ、現在、御饌殿の内には神座が

六座ある。

そのみ前において、往古お供えした品々は

皇大神 御水 二毛比

豊受大神 御水 二毛比

同相殿神 御水 三毛比

御飯 八具 御塩 二坏

御飯 八具 御塩 二坏

御飯 土具 御塩 三坏

（盥・椀）揃え

（御饌殿）参照

合計

561

コクヨ ケー20 20×20

カラーで掲載下さい。
夏の上半分に、限設一杯はみ出し大きく掲載下さい。
出来るだけお願ひします。

新・ヤマト物語 (1) / 62頁の御饗殿を余計に撮影。



191-27 3.408^P-4/4

1404
1304
1204
1104
1004
904
804
704
604
504
404
304
204
104
04
191-27 3.408^P-4/4

『探訪神々のふる里』(四) 熊野から伊勢へ、小学院、昭和57年3月
発行、83頁参照。 榊勝久、学生社、38へ42頁参照。

『外宮』では、天照大神が、板垣内東北隅の御饗殿において、ひそりと祭ら
れる。御饗殿は、板板倉造り、古式を今に伝える。

千木の先端は、外削きである。『外宮(御饗殿)』であつた頃の様式が守ら
れていて、大抵のところが、主として、外削きである。

必要時に取り替へられる。 榊勝久、学生社、38へ42頁参照。 榊勝久、学生社、38へ42頁参照。

榊勝久、学生社、38へ42頁参照。 榊勝久、学生社、38へ42頁参照。 榊勝久、学生社、38へ42頁参照。

堅魚木 428^{ちぎ}
千木 1423^{ちぎ}

3.409^P - 1/2

伊勢神宮64 内院の図

天つき
改行

で、これだけの御食を朝と夕の二回お供え申
しあげていた、という。(「伊勢神宮」桜井
勝彦進、学生社、三八七四一頁参照)

千木・堅魚木

玉垣・瑞垣の四つの柵で囲まれているという
点では同じである。

①御本殿の屋根の上に突出する口千木(破
風の先が延びて交叉した木)の先端が、内宮

では水平(内削ぎ)とされており、外宮では
垂直(外削ぎ)とされている。

②また、御本殿の屋根の上の口堅魚木(棟
木の上に横たえ並べた装飾の木)が、内宮で

は十本で、内宮の別宮以下偶数を用いており
外宮では九本で、外宮の別宮以下奇数を用い

下ヤ
て
いる

14.11.14

「女性」を示すことにならない。
「神宮」パンフレット27の写真外削ぎ

伊勢神宮 64
3.409¹-2/2

起原 } 523⁰
起原

百科②-235¹

という違いがある。(「世界大百科事典」平
凡社、伊勢神宮へ参照)
この差異は、広く、よく知られている。

とはいえ、外削ぎの千木をもつ外宮
の様式の起原が、
・天上の国(九州)にあったと思われ、外
宮(梯の殿堂)に遡るのか、
・それとも、伊勢国にあったと思われ、外
宮(天照大神の離宮)に遡るのか、

あるいは、双方に遡り得るのか、
といったこと等については、分らない。

なお、外宮の本殿の千木だけをなく、
の神殿(御饌殿)の千木は、
であり、堅魚木もまた、奇数、五本であ
る。(写真図版7へ御饌殿へ参照)

天照大神の、内宮だけでなく、内削ぎの
千木が用いられて、非常に興味深く思わ
れる。

(*)

板

③ 3332 ④ 5213 伊勢神宮 35 伊勢神宮 34 遷座 1264 ⑤ 5273 伊勢神宮 35 伊勢神宮 1064 皇太神宮 3333 鎮祭 1467 ⑥ 3383 外宮 = 廣金宮 3394

天照大神曰ハ咫鏡
 降り、長らく外宮（離宮）
 一体、どう
 豊受大神を、宇佐国から伊勢国度会郡に
 お迎えすることになった
 宮（離宮）の主神として祭祀されてきた天照大
 神曰ハ咫鏡は、外宮（離宮）の御正殿
 を豊受大神（梯儻）にお譲りする為
 神宮（内宮）へ遷御されたのか
 から内宮へハ咫鏡を奉戴して行
 たのは長年にわたってハ咫鏡を守
 り続けてきた磯部氏（度会氏）であ
 か
 皇天（神宮）（内宮）
 う要職を帯びて奉仕する宇治土公氏は、磯
 部氏の一族だという
 桜井勝之進、学生社、三五頁、一〇六頁、第

47 表参照

③ 3332 -75

同様
この頁16行へ

ハ咫鏡 2222^P 御霊代 2119^P 部1行(下)
は神体の22

3.411^P

3391^P 凡て433^P ⑤ 3349^P 第
3400^P 伊勢神宮106
3404^P 天照大神
3387^P 天照大神
3399^P 41^P
3401^P

なるほし定かたはないか、こういわけで
磯部氏一族は、口外宮にばかりでなく口内宮
においてもお仕えするようになったのであらう

ともあれ、口外より後、口ハ咫鏡には、伊勢
神宮の口内宮ににおいて、天照大神の御霊代
(御神体)として奉斎されることとなったの
であらう。(既述)「玄辞苑」にハ咫鏡参照

皇太神宮儀式帳

伊勢神宮の神主組織を見ると、次の

ようになった。(第50表参照)

中臣氏を祖と称するのは、口内宮の
木田禰宜の一族だけである。

いっぽう、天御中主尊の十二、十四世孫と
いう天日別命を祖と称するのは、口外宮の
瓊瓊杵尊、および口内宮の宇治大内人

たちである。

聖武天皇の御世(七十二、七十四、七十九)

から数十年の年月をかけ、皇太神宮儀式

前頁17行

4/4.11.8 23
H8.9.24(A) 由 H8.9.29 読4区(完)

30

3,412P-1/3

3385P
3388P
3385P-1/2

3387P-3/3
10分

皇太神宮儀式帳43P
伊勢神宮 18P
伊勢神宮 106

804
124
80

204
249
55

帳が作られていったと解される。先にも述べたが、天皇の延暦二十三年(八〇四)八月二十八日撰進の皇太神宮儀式帳に撰述したのは、いはばほかならぬこの「荒木田禰宜」と「宇治大内人」たちであつたという。(「伊勢神宮」桜井勝之進、学生社、一〇六頁。「広辞苑」皇太神宮儀式帳参照。第六十五章「荒恵比須神」の爲行の項において既述) かつて、伊邪国(宇佐国)と伊勢国の二所の地においてそれぞれ天照大神に奉仕して来た二つの氏族(同族であらう)が、神宮(内宮)についての伝承を、記紀の神代卷にきき沿いつつ一致協力してまとめ上げ、朝廷へ差し出したということを示しているのであらうと推察される。

米

30

567

3387P-3/3
3401P
20分

御霊代 元2119^ナ 3331^ノ 1/5 タイム
 御神体の也、 3334^ノ 4/5
 御霊代 元2222^ナ

3,412^{P-2/3}

三
 四
 頁
 参
 照
)
 と
 い
 う
 。
 ハ
 伊
 勢
 神
 宮
 へ
 櫻
 井
 勝
 元
 進
 、
 学
 生
 社
 の
 神
 主
 の
 上
 級
 者
 で
 あ
 る
 禰
 宜
 と
 い
 う
 職
 は
 、
 氏
 の
 一
 族
 に
 限
 ら
 れ
 て
 い
 た
 し
 参考迄に述べると、
 上代から、明治維新まで、この宮は、
 外宮に留まつて、豊受大
 神にお仕えした
 と思われ。

192
80
2401/2
夢井の池

肥後国の菱形池に出現した八幡神

きょうざう
経路 567P

とな
喝う 1611P

3.414P

(こと)

ぶらぐに ~~お~~おかなかつた。

■ やすらかな仏のお顔には、心をなごませる

優一さがあつた。 ~~哀~~哀れみ給い

■ マーテ御仏は、慈悲深く ~~あ~~あわれみ深く

全てを柔かく包み込んで下さるという。

「迷い、悩み、悲しみを、黙つて聞きとつ

て下さる」

というのである。

■ 何という有難い教えであらうか。

■ 人々は、尊いマコ仏神の前に額衝き、両手

を合わせ、ただひたすら念仏を唱えた。

■ 堂屋の内、和す読経の声か、清冽な響きを

もって大気の中へ溶け込んでいった。

■ ~~い~~なる仏の御心に縋る人々は、新たな

■ ~~の~~今日の日に生きることを喜び、そして

明日への希望を見出し、出で得たように思うのだ

つた。

■ いままきに、仏教が大倭国に根をおろしは

いめたばかりの、黎明の時であつた。

*

[illegible]

採^{そう}な
こと^こな^な
ど^どや
出来^{でき}るものではないし

これらの都人らの心の内には、どうも
振り払うことの出来ない蟠があつた。
「ついでに先達まで、身近に朝な夕な仰きお
仕え申し上げてきた天照大神は、一もはや合
志原から遠く東の国へ天降つて、いまゆめ
たゞいま都の内外には、日を讃美する誦経声か
満ち溢れてゐる。」
「いったい私達は、どうすべ
ばよいのだ。」
「仏神を信ぜよ」とでもいうのだらうか
「いやいや、手の平を返すようなぐそんな不節

天照大神を、東国の伊邪国、宇佐国へお
遷してからというもの。大倭国の都
の内外に、異国の神曰仏神を称嘆する声か
ふつふつと沸き上り、烈しい熱
気もその声の調子は、次第に、
とはいえ、一斉に心を翻
そんなにも安易に、信仰の対象を取り替
して、まっとういふのをあろうか
と憂える多くの大宮人達が居た。

約東 2348

3419 3363-66 3418 大神比義は老人

天照 宇佐八 3355 神異 3418 13 3.416 P-1/2

(た) 神皇正統記 おもひがた、
みかた 新(山)地名 1247 1302 1400
菱形 宇佐神宮 席捲 (巻) 1247 1302 1400
9P この本では「ひかた」
とす 41784

198 1400

人々は、ふつと留息をつき、樹梢樹梢としたや
るせいの寂しさをうのらせるのだつた。そ
て、東方に聳える阿蘇の峯の方をみつめた。
阿蘇山や、九重の山を越えた神風の伊邪国
(宇佐国)へ行かなければ、天照大神を拝す
ことは出来ないのである。
と、そんなとき、キラキラと輝くよう
な、大倭国のかつての神功皇后の都から見
真西の方角にあたる日菱形ノ池に、
応神天皇の生れかわりである日八幡神が現
れ、給うた。
というのだ。
(田真図版 8 菱形ノ池 参照)
欽明朝末年の三十二年(五七一)二月初卯
の日、神異の公卿日大神比義は、
大倭国(肥後国)熊ノ岳の東北麓、日菱形ノ池
(大字円台寺の池)のほとりで、こう言った
とであつた。
かつて、田心姫と月読尊とは、固い約束

首を横に振り下

新(山)地名 135 地図 1316

仙像 3418 八幡大菩薩 1995P
一 自在王菩薩 3418 左 未 新

巻の上 3418 3419 3.416 P 2/2

3418 3355

をとり交された。そして先年、その誓約通り
天照大神と三女神とは、大倭国（肥後国）か
ら、宇佐国の馬城峯山へと降って行かれた
それならば、月読尊は、大倭国（肥後国）
へおいで下さるべきであろう。
そこで私は、ここ菱形池のほとりにて、月
読尊（リ心神天皇）が現れ給うように三年間念
するとうとう何とついに、心神天皇の靈魂
が、この泉のかたわらの笹の上に光りか
かやく三才の童子の御姿で出現された。
おほがのひびき 大神比義が言う通り、菱形池のほとりに敷
かれた笹の上に、三才の童子ほどの高さの光
り輝く仙像（八幡大菩薩像）があつたに違
ない。

*

を実現する為

けんげん 705
みりき
威力とある

3416 2 1/2
3424 P
3426 P

4991 P
4989 P
3430 P

3421 P
3418 P
3418 P

せんげん 1410
断念

せんげん 1403 P
1379 P
断念

2P
3430 P

天照大神 大元山に使令
欽明25年(564) 3371 P

な お、ハ幡神出現時の様子について、こう述べら
れてゐる。(「宇佐神宮由緒記」宇佐神宮庁)

九頁。「宇佐神宮」宇佐神宮庁、二頁参照)

それは、欽明天皇の二十九年(五六八)の

ことであつた。菱形池のほとりに、神光が輝

き走つて数々の不思議が起つた。鍛冶をする

老人や、ハつの頭のある龍があらわれ、こ

の姿をみた者は忽ち病氣になつたり、死んだ

りした。そんな時、この人か定かでないが、大神

比義(宇佐神宮の祠職・大神代の祖)といふ

神異の翁が現れ断食すること三年。欽明朝

末年の三十二年(五七一)二月初卯の日

この泉のかたわらの笹の上に光りかがやく三

才の童子があらわれ、

われは譽田天皇広幡八幡麻呂なり。我を

は護国靈験威力神通大自在王菩薩と申す

と告げられたので、御祀りしたのが八幡大神

御顕現のはじめである

といふのである。

高等地図 10^p
豊前 341^p

どうくつ 云
洞窟 1565

にこ
濁す

せりい
切り石 589^p

3419^p

天つき
改行

菱形ノ池写真新ヤイ 164頁
192^p
はいたい 云
廃稿 1763^p
なごせ 1364^p

3363^p

地籍 1302^p下

みてみよう。

■それでは、肥後国の「菱形ノ池」について

「帝国地名辞典」太田為三郎 名著出版

「菱形」の項に、
「肥後国鹿本郡の村。三岳の東北麓にいて、

飽託・玉名二郡の間に介在す。大字円台寺に

菱形ハ幡宮あり。往古は大社なりしが、今廃

頽す。近傍に菱形地といふ小地あり。形菱に

似たり。里俗ハ幡大神託宣出現の地と称す

とある。

■なお、切り石で菱形に「ど」ら小たこの地の

砂地の下からは、現在でも清水が湧き出して

おり、馬などを洗つて水を濁しても、すぐに

もとどおりの清らかな水に戻る。

■また、池より三〇〇メートル上流の右岸に菱形

ハ幡が祭られ、社の裏手には大きな洞窟があ

つて、豊前の宇佐ハ幡へ通じている、という。

■地名「円台寺」の起こりは、昔、円台寺と

いう天台宗の大伽藍があつたためといい、
「周」

その名ごりとしての「遺」跡が確認されてい

る。
周辺で数多く

→ H4.11.21(土)⑤

3.420^P

心いまい 不思議 曲 3418⁶ 6行

かみほうろ502^P 岩洞 岩のほらあり

鉦本の附 (F) 6^P

白竜窟 (はくりゅうく)

ただ、下の菱形の池には別伝がある。
● 岩洞の中に菱形の池があつて、そこに八幡
神が垂迹されたというのである。
● その穴の中をたどつていくと、いまだに水
が流れており、かつて窪地に水がた
えられ池が形成されていったといわねども、決
して不自然ではないような状態だとなつてゐる
という。(「鉦本の伝説」荒木精一、角川書店、七三頁
「鉦本の地名」(F) 鉦本日日新聞社、八菱形八
幡参照)

井上辰雄

*

九什
 多气不 3383 571 年 348 336 折
 港不 3384-1/2 3362 2折
 领明材料 348 3421

参照

※三女神は壬申乱後、宗像へ

周行天下 b
3332
-2/6

1 菱形池に、応神天皇の生れかわりであ
 る日八幡神が現れ給うた、というのか
 「それはまた、耳よりな話よ」
 「何という喜ばしいことだ」
 この噂は、仏を信ずる者にも、古来の神々
 を敬う者にも、大いに歓迎された。
 こうして、合志原の西方、菱形池の近く
 に八幡宮が創建され、八幡神（応神天皇）が
 祭られた。
 八幡神は、菱形池に出現された
 当初から、朝廷の庇護のもとにあつて、人々
 に尊崇されたことはなからうか。

ともあ水、欽明朝末年（五七一）頃から降
 ① 伊邪国（宇佐国）の馬城峯の山頂に、
 ↓ 天照大神と三女神を祭る。内宮に、
 ↓ 夫君である豊受神（梯俣）を祭る。外宮に
 ② 伊勢国多気郡に、外宮に（離宮）である瀧原宮
 ③ 肥後国の菱形池近くに、八幡神（応神天
 皇）を祭る。日八幡宮に①

かあったのであろう、と推察される。第47表